



熱田神宮古絵図

紙本著色

1幅

熱田神宮蔵

室町時代（享禄年間）の熱田神宮、及びその周辺の様子を描いた『熱田神宮古絵図』（徳川黎明会蔵）を、文化五年に模写した參詣曼陀羅形式の境内図で、春陽爛漫たる境内に、神主・僧侶・武士・町人等を配し、門前の賑やかさを描いている。

当時の社殿は、現在とは異なり、檜皮葺・朱塗柱で、社構も、現在が「神明造」であるのに対し、回廊に囲まれた土用殿・御正殿・渡殿、その南面に拝殿・勅使殿・透垣・楼門（海藏門）が一直線上に建てられる、所謂「尾張造」であった。更に、神域に常行堂・五重塔・多宝塔等、神宮寺の伽藍が建ち並び、神仏習合の様子が顯れている。

尚、御正殿の西北に白い五輪塔が描かれているが、これは、世界三大美女の一人、楊貴妃の墓と云われ、当神宮は古来蓬萊信仰に加え、楊貴妃伝承にも関係のあるユートピアであったことが窺える。

（熱田神宮宝物館 学芸員 内田 雅之）

目 次

- 平成7年度自然科学部門研修会報告..... 2
- 平成7年度美術部門研修会報告..... 2
- 平成7年度歴史民俗部門研修会報告..... 3

平成7年度

自然科学部門研修会報告

平成8年2月8日(木)豊橋市自然史博物館において、愛知県博物館協会自然科学部門研修会が開催されました。参加者は、学校関係者を含め23名でした。以下その概要について報告します。

午前中は、日本電子データム株式会社上瀧良一氏による、走査型電子顕微鏡についての基礎的な講義が行われました。

「電子顕微鏡」とは光源に電子銃を用いたもので、「透過型」と「走査型」があります。今回用いた「走査型」というのは、電子銃から出た電子プローブを走査回路で制御して試料にあて、試料から出てきたり、反射してきたりした信号(電子・X線)を検出するものです。検出する信号によって、試料の異なる情報が得られます。



まず、試料に入射した電子が、試料中の電子をたたき出すことによって得られた二次電子からは、試料の形態がわかります(二次電子像)。試料に入射した電子が、試料上で反射した反射電子からは、試料の組成(重い元素から成っているのか、軽い元素から成っているのか)及び、試料の凹凸がわかります。また、入射した電子によって励起されることで出てくる特性X線を用いることで、元素分析(定性・定量)が行えます。

講義では、このような基礎的な原理から、実際の顕微鏡の構造にまで及びました。

電子顕微鏡のポイントは、電子プローブの発生と試料上での焦点の結び方および、試料から出た信号をいかに取り込んで情報化するかです。講義は多くの図をもとに行われ、私を含め、実際に電子顕微鏡に触れたことのある人にはよく理解できたと思われますが、そうでない人には難しかったかもしれません。さらに、自然史博物館所有の顕

微鏡は低真空モードでも使えるタイプのものであったため、その点についての説明もありました。

電子顕微鏡のような装置は、いくら机上で勉強しようとも、実際に動かしてみないことには理解できません。午後は、参加者が持ち寄った試料や自然史博物館の試料を使い、実習が行われました。

持ち寄られた試料は、そのままでは電子顕微鏡で見ることができないため、前処理が必要となります。そこで、自分の試料がある人は上瀧氏の指導のもと、試料を台座に乗せ、金蒸着を行いました(一部蒸着できないものもありましたが)。そして、時間が短いため複雑な操作はできませんでしたが、日本電子株式会社の高木滋夫氏の指導のもと、参加者1人1人が、試料を自分で様々な倍率に変えて観察しました。テレビや書籍では見たことのある電子顕微鏡の像も、実際に操作して見ることができたときの興奮はひとしおです。午前中ほとんどなかった質問も、ここにきて活発になされるようになりました。試料を持参した参加者は、それぞれ、ポラロイド写真を撮ってもらい、持ち帰ることができました。用いた電子顕微鏡にはエネルギー分散型X線分析装置が装填されていたので、元素分析も行われました。操作は講師の方が行い参加者はただ見ているだけでしたが、ディスプレイ上のX線強度のグラフに強いピークが現れ、そこから元素が同定されるのは、皆興味深げでした。

以上が研修会の概要ですが、最後に、この研修会開催にご尽力いただいた方々に深く感謝いたします。

(愛知県陶磁資料館 学芸員 梶塚 泉)

平成7年度

美術部門研修会報告

平成8年2月22日(木)、美術部門の研修会が、昭和美術館で開催されました。この研修会はいつものことながら、内容盛りだくさんで、終ったあとは、いつも疲れを覚えるほどです。しかし、それは、いかにも「愛博協の研修」にふさわしい充実感を伴ったものもあります。簡単に言えば、「今日は得をしたな」ということです。これも、研修を担当していただく、昭和美術館の服部さんを始め館員のみなさんの御苦労によるものと感謝いたしております。

さて、今回の研修は、それぞれ分野の異なる、

しかも身近なテーマを取りあげており、非常に興味のあるものでした。その内容について簡単に御報告いたします。

1. 「展示物の諸吊下金具及び安全対策」

講師 中村多喜弥商店 山本氏



1時限目 中村多喜弥商店

美術館のピクチャーレールやハンガー等に実績のある中村多喜弥商店の、最新の吊下げシステムの説明があり、更に転倒防止のウレタンマットが披露された。阪神淡路地震の影響で、美術品の安全対策が取り沙汰されている折、出席者の関心は高かったようです。終了後も、担当者を取り囲んで質問する姿が見受けられました。

2. 「近年における美術界の回顧・展望」

講師 有海千尋氏（中日新聞文化部）



2時限目 中日新聞文化部記者 有海氏

地元新聞の文化部記者として、非常に幅広い分野の取材をしている講師が、取材の基本的な姿勢を語り、作品と作者の関係を追求するなかでの裏話等を話された。特に、芸術展は名品主義である必要はなく、展示の切口が重要であるという点を強調され、共感を得ていました。また、著名な芸術家のエピソードも、新聞記者ならではの視点で、面白く拝聴できました。ただ、一人で全地域の美術一般をカバーするのでは、積極的に売りこんでも、なかなか取り上げられないだろうなという気

はしました。

3. 「東洋美術品の変遷及び学術的役割」

講師 小田栄一氏（春海商店社長）



3時限目 小田 栄一氏

小田氏は、現役のしかも老舗の道具商であるところから、美術の概説というより、具体的な金額も出た。古美術業界の裏話的な内容は、興味ありました。なかでも、真物と贋物の間に灰色の作品があり、それが、金額で納得できるということは、まさしく道具商の世界だなと思いました。また、茶道具にまつわる、掛け物や銘の話には、思わず傾かされました。しかし、阪神淡路地震を身をもって経験され、しかも転倒防止については、作品を展示するという立場を強調されたことは、やや意外でした。

4. 「博物館・美術館の文献等の収納における空間構成」

講師 吉柳満氏（アート設計事務所）

内容 略

長丁場の研修でしたが、内容が多様で退屈する間もなく、途中退席もなく有意義な一日を過ごすことができました。

（愛知県陶磁資料館 浅田 員由）

平成7年度

歴史民俗部門研修会報告

平成8年3月14日(木)、名古屋市博物館に於いて愛知県博物館協会歴史民俗部門の研修会が開催されましたのでその概要をご報告します。当日の参加者は43名、内容は、初任者向けの実習を含んだ講義でした。

1. 「和本」の種類と修復実習

講師 名古屋市博物館 下村信博氏



最初に和本の種類と歴史についてビデオを観て学習した後、それぞれ和本の修復実習をしました。和本は、巻子本、折本、粘葉装、綴葉装、大和綴、袋綴と閲覧しやすいように、破損しにくいように、虫に喰われにくくなどと改良されていった歴史があり、どの和本も積み重ねて収蔵するのに適しているのが洋本と大きく違う点だということです。

実習では、袋綴の修復実習をしました。絹の穴糸とブック針を使用し順にかがっていくのですが、意外と手軽に修復ができるのを知ることができ、館で収蔵している資料でさっそく実践してみようと思いました。

2. 資料の取扱い・梱包入門

講師 元日本通運 笹木繁光氏



梱包資材の種類と性質をひとつおり説明していただいた後、薄用紙からのひもの作り方、綿を薄用紙で包んだ布団のつくり方、和本の梱包のし方の実習を行いました。

梱包資材を扱う場合に、表と裏、繊維の方向にも気を配ることや、同じ薄用紙の布団でも、梱包するものや部分によって作り方や大きさを変えたり、梱包するときにテープで貼り合わせた部分を外

にすることなど細かな点まで教えていただきました。

また、笹木先生が資料を梱包されるときの何気ないしぐさの一つ一つが、資料をひっくり返さないように注意されていたり、作業に無駄のないようにとの配慮のもとに行われているということで、考えてみれば当然のことなのですが、今回の研修で教えていただかなければうっかり見落とてしまいがちなことに気付くことができ、今後、他館及び一般の方より資料を借用する際などには気をつけなければと思いました。

3. 特別展「木曾」企画から展示まで

講師 名古屋市博物館 種田祐司氏

研修当日、会場の名古屋市博物館にて開催中だった特別展「木曾一檜と中山道の村々」を担当された種田祐司氏に、今回の特別展がいつ頃、どのように企画の内容が決まり、開催までどんな手順で作業が進められるのかを話していただきました。

名古屋市博物館では、担当者が決まってから企画を決め、開催の約1年半前に予算要求書を作成し、調査にはいるそうです。

展示の説明のパネルの文字の大きさに気を配った等の話も参考になりましたが、印象に残ったのは、自分の企画にかかりっきりになってしまって他の企画に目を向けていないでいると、そのときに指摘のあった間違いを自分もしてしまいかになるので注意しなければならないということでした。

館によって状況の違いもありますが、こうして展示の企画から開催までの手順を教えていただける機会は少ないので、参考にできる部分も多かったのではないかでしょうか。

講義が終了した後、特別展「木曾」の見学をさせていただきましたが、いつもと少々違った視点で見学することができました。

(蟹江町歴史民俗資料館 大野 麻子)

「愛知の博物館」No.63

発行日 平成8年3月30日

編集・発行 愛知県博物館協会

〒489 愛知県瀬戸市南山口町234番地

愛知県陶磁資料館内

TEL <0561> 84-7474

FAX <0561> 84-4932